

顕彰状

坂井利郎氏は1947年11月23日に東京都世田谷区に生まれた。成城学園中学校時代に兄の影響でテニスを始め、めきめきと頭角を現した。

1966年早稲田大学教育学部教育学科体育学専修に入学し、庭球部の門をたたいた。当時の本学庭球部は、大学テニス界において上位4校からなる1部の常連となる強豪部であったが、入部と同時にレギュラーを獲得した氏は、エースとして目覚ましい活躍を見せた。2年次には、男子テニス国別対抗戦デビスカップの日本代表に選出され、初陣となる韓国戦では見事勝利を収めた。4年次にはキャプテンとしてチームを牽引し、それまで13連敗していた早慶戦では早稲田大学を勝利に導いた。

大学卒業後は、住友軽金属工業株式会社に入社。1977年までデビスカップ日本代表のエースを務めたが、特筆すべき試合は1971年、対オーストラリア戦での勝利である。当時のオーストラリアは、デビスカップで22回の優勝を誇る強豪国であったが、この年は2対2に持ち込み、勝敗の行方は氏に託された。相手は世界的名選手のジョン・クーパー氏であったが、氏は冷静に試合運び、対オーストラリア戦において日本に50年ぶりの勝利をもたらす立役者となった。さらに、1973年の対オーストラリア戦では、当時世界屈指の選手と評されたジョン・ニューカム氏を破る殊勲をたてている。

全日本テニス選手権では、シングルスで1974年、1975年と優勝し、ダブルスでは1971年から6連覇を果たした。また、全日本室内テニス選手権では、1969年からシングルスで8度、ダブルスでも6度の優勝を重ねた。海外においても、1971年全米オープン、1973年全英オープン、1974年全仏オープンのグランドスラム大会にてそれぞれ3回戦に進出、1974年にテヘランで開催されたアジア競技大会では、シングルス、ダブルス、団体で優勝し、金メダル3個を獲得するなど、日本のトッププレイヤーとして輝かしい戦績を残した。

現役引退後は、デビスカップや女子テニス国別対抗戦フェドカップの日本代表監督として歴代トップクラスの選手を指導し、松岡修造氏、伊達公子氏等の躍進にも寄与した。1984年デビスカップでは29年ぶりとなる東洋ゾーン優勝、1996年フェドカップでは圧倒的な強さを誇っていたシュテフィ・グラフ氏を擁するドイツを破り、日本史上初のベスト4に導くなど、指導者としても高い評価を得ている。また、盛田正明テニス・ファンダ設立にも貢献し、錦織圭氏をはじめとした有望な若手選手が世界へ羽ばたくきっかけを作った。現在は、日本テニス協会副会長を務め、日本テニス界の更なる発展に尽力し、2020年に国際テニス連盟より、「テニスに貢献した選手の賞」(Awards for Services to the Game)を授与されている。

本学においては、庭球部監督として学生の指導に注力するとともに、非常勤講師としても教鞭をとり、テニス指導を通じて本学のスポーツ振興にも寄与してきた。氏は、学生時代に監督として指導を受けた福田雅之助氏の「この一球(この一球は絶対無二の一球なり)」の教えや、試合のみならず生活の場におけるグッドマナーやフェアプレーの精神を重んじ、テニスを超えて人間として大切にすべきことを継承すべく、後進の育成に邁進している。

ここに早稲田大学は、日本テニス界と早稲田大学における永年にわたる多大な貢献と献身に対して、坂井利郎氏を早稲田大学スポーツ功労者として表彰し、永くその榮譽を讃えるものである。

2021年4月1日

早稲田大学